

札幌くらぶ

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)

全国音楽ボランティア札幌フォーラム開催

札幌くらぶも積極的に参加



長野県松本市で開催された第1回音楽ボランティア全国大会を受け、今年のPMFの期間にその第2回の大会が、札幌で開催されました。札幌くらぶにも関係の深い大会として、スタッフを中心に10名以上が参加しました。

公式日程ではありませんが、7月29日のゲルギエフ指揮のPMFオーケストラのゲネプロ見学、翌30日の公式日程のピクニックコンサート鑑賞に続き、31日にはホテルライフオーでメインのフォーラムが開催されました。

午前中は開会式で上田会長が札幌市長として歓迎の挨拶を述べられました。続いて、札幌出身のNHKアナウンサー森田美由紀さんによる「芸術文化のあるまち」と題する記念講演が行われ、ご自身の外国での体験を例にした興味深いお話に、参加者は聞



き入っていました。

午後は、4分科会と全体会（パネルディスカッション）が行われました。

札幌くらぶは第二分科会「オーケストラを支援するボランティア」に参加しました。札幌コンサートマスターの大平まゆみさんと、札幌くらぶ副会長の西川吉武さんが座長を務められ、日本各地から参加された方々と貴重な情報交換と、意見交換を行いました。

全体会では大平さんが第二分科会を代表してパネリストになられ、良質の音楽活動を支えるボランティアの在り方につき、多方面からの示唆に富んだ報告がなされました。

実質、たった一日の大会でしたが、多くのことを学んだ大会でした。



札幌くらぶは札幌を愛する人達の札幌応援団です

桂冠指揮者岩城宏之氏 追悼特集

札幌交響楽団初代音楽監督として、また、終身桂冠指揮者として札幌交響楽団の発展に多大な貢献をされた岩城宏之氏が、去る6月13日未明にご逝去されました。今号は、岩城氏追悼特集号といたします。



岩城氏についての札幌交響楽団からのコメント

札幌交響楽団事務局長 宮澤 敏夫

札幌桂冠指揮者岩城宏之氏は、1975年にP. シュヴァルツ氏の後任として札幌正指揮者に就任、78年から11年間、音楽監督として在籍され、オーケストラの飛躍の向上につくされました。「澄んだ音の札幌」の原点です。この間、全曲を武満徹作品で揃えた定期演奏会や1985年、黒澤明監督の「乱」（音楽・武満徹）のサウンドトラック収録をするなど、次々と大きなプロジェクトを成功させました。お蔭で札幌は「武満が愛したオーケストラ」として内外にアピールさせていただいております。これは偏に岩城氏と札幌の相性の良さを証明するものです。

また岩城氏のバイタリティーある演奏スタイルは多くのファンを作ってくれました。

まだ若かったオーケストラをP. シュヴァルツ氏が基礎作りをされ、花を咲かせた岩城氏は黄金期を作ってくださいました。

岩城氏は札幌の楽員とも家族のような付き合いをされており、昨年の定期演奏会に来演の折りには、楽員たちと札幌ドームに日本ハムの応援に出かけられ、大いに楽しめました。

まだまだ一緒に演奏したかったですが、誠に残念です。ご冥福を心からお祈りします。

岩城宏之氏プロフィール

1932年東京生まれ。東京芸術大学音楽学部打楽器科に学ぶ。在学中にNHK交響楽団副指揮者となり、56年デビュー。60年N響と世界一周演奏旅行を行い一躍海外でも注目され、62年チェコ国立放送交響楽団を指揮してヨーロッパのオーケストラにデビュー。以来、国内はもとより、ベルリンフィル、ウィーン・フィルをはじめとする国外の主要オーケストラを常時客演指揮し、国際的な演奏活動を行ってきた。特にメルボルン交響楽団との関係は長期にわたり、74年首席指揮者就任、87年桂冠指揮者の称号を受けた。94年メルボルンに岩城の名を冠した「イワキ・オーディトリウム」がオープン。

国内においては、88年オーケストラ・アンサンブル金沢の設立に尽力し、発足とともに音楽監督に就任、コンポーザー・イン・レジデンス制度や日本人作曲家への作品委嘱、定期演奏会におけるゲスト・オーケストラのシステムの確立、海外公演、CD録音と意欲的な活動を展開してきた。演

奏活動以外にも、テレビ・ラジオへの出演、プロデューサー、音楽アドバイザー、執筆活動等多方面にわたる。

その他、石川県文化行政顧問、福井県音楽アドバイザー、作陽学園音楽最高顧問理事、東京芸大客員教授も務めていた。87年中島健蔵音楽賞、88年サントリー音楽賞、93年放送文化賞、96年紫綬褒章受章、05年度朝日賞受賞。また、エッセイを中心に著作も多数あり、「フィルハーモニーの風景」で91年日本エッセイストクラブ賞を受賞している。

精力的な活動を続け、NHK交響楽団終身正指揮者、メルボルン交響楽団終身桂冠指揮者、札幌交響楽団終身桂冠指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、京都市交響楽団首席客演指揮者、東京混声合唱団音楽監督を兼任。また、石川県立音楽堂芸術総監督も務めていた。日本芸術院会員。近著に「オーケストラの職人たち」（文芸春秋）がある。

マエストロ岩城の逝去を悼む

音痴だというレッテルを貼られ、音楽など興味を持たないようにしていた私が、音楽のすばらしさに目覚めたのは、小学校5年生の時だった。音楽専任教師が授業を持って来て、「君は音痴ではないよ」と言ってくれたその時である。以来今日まで48年、私の生活の中にはどこか必ず音楽があり、心豊かに暮らすことができたように思う。人は誰かとの出会いで、生涯の生き方が変わると思う。私にとってこの教師は音楽との出会いを作ってくれた恩人である。

岩城さんを知るようになったのは、多くの方がそうであるように、テレビでクラシック音楽番組が放映されることによってである。十勝管内幕別町で生まれ育った私にとって、クラシック音楽の生演奏などというものは、全く別世界のことであった。オーケストラなどというものが、一体どういうものなのか、知るわけもない。ましてや指揮者が誰かなど興味の外であった。しかしテレビの時代が到来し、茶の間にオーケストラがやって来た。ブラウン管いっぱい指揮者の表情がこれでもかと言わんばかりに写し出され、指揮者の表情で音楽が変わって聞こえることの不思議を体験することになった。私がこどものころNHK総合テレビで「プロムナード・コンサート」という番組が放映されていた。毎週何曜日であったか30分くらいの短い番組であった記憶だが、若き小澤征爾さんや岩城さんの指揮でN響が名曲を聞かせてくれていた。オーケストラというものが大衆化したのは、このテレビ放送抜きには考えられないと思う。演奏会場は、多くが東京文化会館であり、その映像を見るたびに実際にホールに入りたいという思いが募ったものだ。高校の修学旅行の際、東京での自由時間は、真っ先に上野の東京文化会館に行きその建築美を堪能した。そんな私の少年時代の記憶の中に、岩城さんはしっかり位置付けてはなれない。「題名のない音楽会」であったろうか、岩城さんが両手を後ろに回して固定し、顔の表情だけで指揮をするという場面を見たことがある。音楽を、オーケストラを楽しめるものにし、多くの音楽ファンをつくってゆこうと必死になっておられた若き日の岩城さんの姿を今も思い出す。

札幌で生活をするようになって、札幌をメジャーオーケストラに育てようと懸命になっている岩城さんの指揮による札幌演奏会には、ほとんど聞きに行っていると思う。爆発的なフォルテッシモを、深い眠りの入り口に立ち、今まさに意識と無意識の狭間にいるが如きピアノッシモを、あのダイナミックな身体全体を駆使した動きで、あるいは無作動で、音楽への情熱と美意識をオーケストラに、そして聴衆に伝えようとしていた岩城さん。間違いなく、私はそして多くの札幌ファンはその支持者であった。なぜなら、私たち札幌のファンもまた岩城さんに育てられたからだ。札幌にとっても、札幌くらぶのメンバーそしてこれらを取り囲む札幌のクラシック音楽を楽しむ人々にとって、岩城さんは恩人なのだ。

岩城さんと一度だけお話をさせて頂いたことがある。何年まえのことであったろうか。札幌楽員の方々の新年会に私がお招きを受けた時のことだ。岩城さんと隣り合わせの席に座った。楽員の薦めで私の持ち歌「第9ロック」(日本国憲法第9条の条文を歌詞にしたオリジナルで私が歌ったCDが発売されている曲)を岩城さん並びにほぼフルメンバーの札幌楽員の前で歌わせてもらうことになった。もちろんカラオケで。札幌をバックに歌う方は数知れずおられますが、私は無謀にもマエストロ岩城が臨席する札幌の前で歌うという、極珍しい体験をさせてもらった。歌い終わって岩城さんの横に座り、おそろおそろ感想を聞いてみた。岩城さん曰く「かわってるね!」と、一言であった。それでも、聞いて頂いたことに、私は満足でした。

マエストロ岩城を失った今、もうあの指揮姿もそこで追求しようとした音楽美のほとぼりも、演奏終了後の満足げな笑顔も見られないかと思うと、本当に寂しい。過日の定期演奏会で高関さんの指揮で岩城さんがアンコールでよく演奏されたとのことで「ロザムンデ」を追悼演奏された。プログラムに記されていた尾高さんの文章を読みながら、曲が終わるまで涙が止まらなかった。

マエストロ岩城、ありがとうございました。安らかにお眠り下さい。

札幌くらぶ会長(札幌市長) 上田文雄

岩城マエストロの死を悼む



岩城宏之さん、札幌で初めてお目に掛かったのは、ホルン奏者として1964年4月10日の第28回定期演奏会、印象はとても厳しい指揮者だった。札幌にはその後75年10月から正指揮者、更にその後87年まで音楽監督を務めて頂いた。正指揮者になられた時からはマネージャーとしてお世話になった。

去る6月13日に逝去された。享年は73歳だった。

4月中旬のオーケストラ・アンサンブル金沢(OEK)の演奏会で指揮をされる予定が入っていたので楽しみに伺った。しかし、演奏会では指揮者が代わっていた。検査入院だとのことだった。翌日会った岩城マエストロのマネージャー三枝成章氏に尋ねたらやはり「単なる検査入院で間もなく出てきますよ」とのことだった。事実、その後行われたOEK第200回定期演奏会、5月に入って長年音楽監督を務められた東京混声合唱団の創立50周年記念コンサートも車椅子で指揮された。それが最後の指揮だった。

夫人のピアニスト木村かをりさんのお話によれば最後の最後までベッドの上で指揮しておられたそうである。「指揮台で指揮しながら死ねたら格好いいね」と常々言われていたが混濁した意識の中にも音楽が鳴り響いていたのだろう。

7月16日には金沢市にある石川県立音楽堂で追悼式と追悼演奏会、18日には東京のサントリーホールで追悼式が営まれた。私は両方の追悼式に参列した。

石川県立音楽堂は岩城マエストロがOEKの本拠地として自分のイメージどおりに造られたホールだ。ホールは2階から始まりステージは40人編成ほどのOEKのサイズ、客席は4層で

1560席ある。

1階は一般通路としてロビーになっている。追悼式当日は1階のロビー正面に岩城さんの遺影が飾られ、献花台が置いてあった。朝から市民が献花に訪れ追悼式が始まる午後3時頃には献花台は既に菊の花で埋まっていた。

追悼式ではOEKの楽団長でもある県知事と金沢市長がそれぞれ弔辞を読まれた。型どおりの弔辞ではなく心のこもった言葉を重ね参列者の涙を誘った。友人代表の外山雄三氏は、「20回を越す手術から不死鳥のように蘇ってくる君を、こんな形で送ろうとは夢にも思っていなかった」と悔しがられた。

引き続き追悼コンサートが開催された。ステージにはOEKが並び、池辺晋一郎の司会、外山雄三、天沼裕子が指揮、最後に池辺晋一郎の指揮で岩城さんがこよなく愛していたといわれる「夏の思い出」を県立音楽堂合唱団と参会者全員が歌った。舞台の上も会場も涙ながらの歌声だった。舞台裏は手放して泣いていた。岩城マエストロが金沢にしっかり溶け込み市民に愛されていた様子が伝わってくる追悼会だった。

岩城マエストロと札幌との関係を外部の人から聞く機会はなかなか無いものだが、期せずして金沢でそれを聞くことが出来た。追悼演奏会の冒頭で外山雄三指揮OEKが武満徹の「波の盆」を演奏した。指揮を終えた外山雄三氏に司会の池辺氏が「親しかった岩城さんと武満さんの親密さは近くでご覧になっていかがでしたか」と質問した。

外山氏は「僕は近くで見ていた訳ではないのですが(武満サークルに入っていない意味:竹津注)、イワキは口を開くと札幌の演奏する武満

が良いだろう、と自慢していましたよ」と答えられた。OEKを前にしていささか恐縮しながら嬉しく聞いた。岩城マエストロは札幌をそれほど誇りにしていたのだ。

思えば札幌は岩城マエストロのお陰で全国に名前を知られるようになり、岩城マエストロを通じて武満さんと親しくなったお陰で国際的にもなった。岩城マエストロが定期でオール武満のプログラムをすと言い出し、岩城・札幌の演奏を武満さんが気に入られ、札幌は度々武満作品を演奏するようになった。そして次に全曲が世界初演のオール武満プログラムの演奏会が生まれた。更に黒澤明監督の映画「乱」の音入れに結びついたのである。

岩城さんが事ある毎に周りの人たちに「武満の音楽は札幌の演奏で聴いて」と言っていたとは札幌の人たちは誰も知らなかったのではないかと思われる。

岩城マエストロは札幌正指揮者に就任当時、札幌を日本のクリーブランド・オーケストラにすると宣言された。オハイオ州の鉄鋼の街クリーブランドの地方オーケストラだったクリーブランド・オーケストラをジョージ・セルが音楽監督に就任してから短期間で米国3大オーケストラの1つに育て上げたのである。もっともセルは就任して数年で気に染まない楽団員約半数を入れ替えたと言われている。ひょっとしたら岩城マエストロにも同じ思いがあったのではないか、楽団員出身の事務局長だった私と何度か議論した大きな問題点の1つだった。

もう1つの大きな課題は、楽団員の増強だった。岩城マエストロの要求は4管編成88人だった。理解出来る数字だし事務局長の立場からするとマエストロと一緒に理事会に要求を出すべきだったが、年中、道内を行脚し札幌を行商して歩いて各地の演奏会場のサイズや北海道の経済的な状況を知っていた私としてはすぐにお応えすることが出来なかった。マエストロは要求は要求として出し続けられたが、実現出来ないからと言って最後通告を突きつけられる方ではなかった。楽団運営の経済的な事情にはご理解があった。大阪・東京公演でも編成を増やして格好をつけることはしなかった。岩城マエストロの理想「クリーブランド・オーケストラ」への道のりは時間が掛かるのだが、年を追う毎に共演する外来の指揮者（ヤン・クレンツ、ズデニク・コシュラー、アルビド・ヤンソンス、ラファエル・フリーベック・デ・ブルゴスなど）から「札幌にはどうして東京より良いオーケストラがあるのか、音楽監督は誰か」と聞かれるようになり、その度に私は胸を張って「岩城宏之です」と答えるのだった。

私は岩城マエストロに頼まれて、マエストロが音楽最高顧問を務めていた「くらしき作陽大学」と音楽監督を務めていた福井県の（財）福井文化振興事業団の仕事を10年来続けている。

札幌にとっても私にとってもかけがえのない人を失った。本当に残念だ。

ご冥福をお祈りします。

（竹津宜男）



1986年6月定期演奏会（厚生年金会館楽屋にて）
かをり夫人に見送られてステージに向かうマエストロ

楽員さんの「岩城さんの思い出」(順不同・敬称略)

私のオーケストラ生活のスタートは、23年前岩城音楽監督の時代でした。お客さんを楽しませることを一番に考え、また、いつも自らの演奏のステージを一番楽しんでおられたと思います。去る7月18日東京サントリーホールのお別れ会で、岩城さんが好きだったというベートーヴェンの交響曲第8番を演奏させて頂きました。古典から現代まで様々な曲を教えて頂きましたが、大曲の狭間に佇む清涼なこの一曲に岩城さんの素顔を見たような気がします。演奏の合間にふと見あげると、遺影の岩城さんは少年のようないたずらっぽい目を輝かせ、おだやかに笑っていらっしやいました。川崎昌子(チェロ)

私が入団した頃の札幌は、岩城・尾高の二枚看板時代。初定期での「ウェストサイドストーリー」。初めて触れた彼の指揮は、全身目の如くというのが第一印象。楽員一人一人の顔の表情さえも見逃さないぞという気迫、圧倒的なカリスマ性を持った指揮台の上からの暴君!?!しかし、そこから降りると、実にぎっくばらんに、自身の出演したドラマの写真を握りしめ「ねえ、見て見て」と子供の様に無邪気に話し聞かせてくれたものです。いつでも、「やあ」とあの素敵なニコニコ顔で、手を振って現れる様な気がしてなりません。マエストロ、お疲れ様でした。どうかまた会う日まで、お元気で。

石原ゆかり(ヴァイオリン)

私が23歳で入団した時の札幌指揮者はシュバルツさんでしたが、その後しばらくしてから岩城さんが指揮者に就任されました。岩城さんは打楽器出身の指揮者でしたし、演奏会でも打楽器が活躍する曲目を取り上げることが多く、今までよりも私は急に忙しくなったのを覚えています。ラベルやストラヴィンスキーや武満などの現代曲などよく演奏しました。また、岩城さん自身が得意なマリimbaや打楽器を札幌をバックに演奏されたこともありました。私の打楽器リサイタルには励ましのお言葉を頂いたり、打楽器セクションとビール園に行ったこともありました。若き日の私は岩城さんのお陰でたくさん勉強することができ、打楽器奏者として成長することができたと思います。岩城さんにはとても感謝しております。御冥福をお祈り致します。

真貝裕司(打楽器)

岩城さんと初めて共演したのは一昨年の大晦日。ベートーヴェンの全曲コンサート。一日で全曲!なんてバカげた。でも面白そうだなと。終わった後に残ったのは筋肉痛の足と、素晴らしいタクトをとったマエストロへの感動でした。次に岩城さんとお会

いしたのは札幌でした。リハ後、岩城さんのホテルの部屋で「年越しコンサート出ました」というと、「死ぬまでやるよ」と!!本当にびっくりしました。その日ホテルの部屋から中島公園の夏祭りがきれいに見えました。奇しくも今年の夏祭りの日に岩城さんの訃報を聞くとは…。僕はあの日の岩城さんの笑顔が忘れられません。助川龍(コントラバス)

指揮棒を持った岩城さんの溢れんばかりの目の力と、演奏会終了後の柔和な笑顔がとても印象に残っています。僕は、ベルリン留学時代、ベルリンフィルの定期演奏会でベリオーズ作曲の幻想交響曲を岩城さんがお振りになり御一緒させて頂いた時が、最初の出会いでした。とてもエレガントでエネルギッシュな指揮のもと、楽員の皆さんが一体となり素晴らしい演奏会でした。その後札幌でたくさん演奏会を御一緒させて頂き、多くの経験と勉強をさせて頂きました。北海道の音楽文化、そして札幌にとっても様々な偉業をお残し下さった岩城さんに心から感謝申し上げ、御冥福をお祈り申し上げます。

松田次史(トランペット)

グリーンコンサートで気軽に楽しむクラシックを広め、ドイツ古典音楽に偏り気味であったそれまでから、色々な国、時代の音楽を取り上げ、邦人作品を積極的に紹介し、武満氏と札幌の強い関係を作り上げた、と枚挙に暇が無い。故岩城氏とは随分酒席をご一緒させて頂いた。いつも笑顔で世界中のオケの話をしてくださり、メルボルン響が来札した時は合同飲み会の企画と、仕事を離れても楽員と楽しむ氏の姿が思い出される。昨年夏、岩城御夫妻と多くの楽員が札幌ドームで一緒に観戦したのが最後の思い出となってしまった。ご冥福をお祈りします。

市川雅敏(ホルン)

1975年に常任指揮者に就任した(後に音楽監督、桂冠指揮者)岩城さんとは「題名のない音楽会」のリハーサルを聴きにいった時や、他のオーケストラにトラで出演した時に会う機会がありました。当時練習が始まって暫くすると良く言っていた「これは札幌の音じゃない」という言葉を他の所ではあまり聞いたことが無いので、彼の中には、札幌で醸し出す音楽に対する強いイメージがあったのだと思います。今、岩城さんから頂いた2本のパイプを手に、往時を懐かしく思い出しております。

一戸哲(ファゴット)

20年以上も前……

「男のためのやせる本」という本を読んだ。中心的

なテーマは“糖尿病食こそ理想だ”ということだったと思う。食べ過ぎずバランスよく、そのためには多種類を少しずつ、当たり前と言えばそれまでの実践記憶していることが一つ。「10日に1度、ハメをはずす日を決める」これを実践したらなかなか良い結果が出た。しかし、時が経つにつれ、また環境が変わるにつれて「10日に1度」が「週に1度」になり「3日に1度」になる時代がやってくる……。

10年くらい前……

札幌でのホール建設に関するシンポジウムでの氏の発言の中から。I県でオーケストラを発足させる際に名称を考えた。県のお役人は「是非、県名を入れて」ともくろんだらしいが「I県なんていってもインパクトがないでしょ？おたくの県はK市があるから有名なんだろ？」ついでに「だからこのオケはアンサンブルK」みごとに言い切った……。

1年ちょっと前……

キタラのステージ上に、札幌のメンバーが並んでいる。今日は定期演奏会。指揮者は岩城氏。隣には今月で定年退職されるM氏。岩城さんと札幌、そしてトロンボーンの大先輩の引退——。万感の思いを胸に演奏した。これが氏の札幌最後のタクトになってしまうとは……。こんな演出を誰が考えたのか。

「男のためのやせる本」サブタイトルは「つねに雄々しく戦い続けよう」だった。これを機会にもう一度戦う姿勢を取り戻したいものである。 合掌

田中徹（トロンボーン）

私がプロのトランペッターになれた時、それは札幌交響楽団の入団オーディションを受けた時である。大学の掲示板に団員募集の張り紙！札幌である。いいな—岩城さんが指揮者、Tpにはあの杉木さんがいる、よし！札幌に行きたい！そしてオーディションを受けたのである。自分はTp11人の10番目である。前の奏者の音がドア越しに聞こえる。そしていよいよ自分の番である。呼ばれてステージへ、鼓動がドキドキ他の人にも聞こえそうである。杉木さんの指示で演奏を開始……と客席には岩城さんの姿が……今思えば、2列目位に戸沢さんも……もう何をどう吹いたかは覚えていない。岩城さんと音楽仲間のチューバ奏者の多戸さんを始め、色々な方々のお力添えを頂いて、岩城さんと自分の音楽を通したお付き合いが始まった。今思い出す一番印象深いコンサートは、旧道庁前庭で行われたグリーンコンサートです。曲目はスターウォーズ、映画で使われた譜面による全曲演奏でした。お客様は2万人、あの時、岩城さんて何てエネルギーがすごいなー！と思いました（格好よかったな）。そして岩城さんはゴルフの名手！奥様の木村かをりさんと一緒にプレーさせて頂いた事も何度かありました。オーストラ

リアから持っていらっしやったブローニングというメーカーのクラブを使われていましたね〜。スコアの方はよく覚えていませんが、ナイスショットの時もミスをした後も、常にジェントルマンでしたね。そんな岩城さんのお人柄に触れた事によって、今の自分が有ると思っております。少しの時間でしたが、ご一緒出来ました事を幸せに思っております。ご冥福をお祈り申し上げます。

前川和弘（トランペット）

私は小さい頃、テレビでオーケストラの演奏を視聴する事が楽しみでした。でもどちらかというと、演奏より指揮者の棒捌きや動作が面白くて、指揮を観ながらその格好をまねして遊んでいました。取分け印象に残っているのは、岩城さんの指揮です。オーケストラはN響だったと思いますが、曲は覚えていません。彼の指揮は颯爽として表情豊かで身体がしなやかに動いて「カッコいい！」と唸りながら私は夢中で彼の指揮を見ていました。その頃はまさか自分がオーケストラプレーヤーになろうとは夢にも思っていませんでしたが、それこそ何十年後に彼の指揮の下で演奏する機会に恵まれました。あの子供の頃憧れていた岩城さんの指揮で演奏できるなんて凄い！と密かに一頻り感動していました。様々な曲を演奏しましたが、特に印象深い曲はストラビンスキーの3大バレーです。ある年の定期演奏会で、一晚で一気に3曲演奏しました。彼は全曲を暗譜で、淡々と的確に、身体の動きは最小限にして、難しい変拍子はいとも簡単に、しかし顔の表情は曲想をオーケストラの隅々に伝えるべく、何ものからも超越した雰囲気指揮していらっしやいました。子供の頃見た印象とはだいぶ変わってはいましたが、どこか神懸かっていた感じがしました。人生の晩年の、ある意味では悟りを開いた境地とでもいうのでしょうか。そう言ったものがひしひしと伝わってきた演奏会でした。その場において指揮を間近に見て一緒に演奏することができたことは、私にとってかけがえのない一生の財産になりました。あらためて心からご冥福をお祈りします。 遠藤幸男（ヴィオラ）

私がオーケストラという存在を意識したのは中学生の頃でした。当時は「NHKコンサートホール」という番組でN響の演奏を見る機会が多かったのですが、名前の覚えられない外来の指揮者とは対照的に、岩城宏之という顔と名前はまさにN響の指揮者として私の中で君臨していました。番組解説者の大木正興氏が岩城さんのことを「えびす様」と呼んでいた頃です。「えびす様」の何たるかよく分かっていなかった私は「へえー、えびす様ってこういう顔（次ページに続く）

してるんだ」と勝手に理解する一方で、何か音楽を通して幸せを運んでくれる使者であるような期待感を持ってテレビを見ていた記憶があります。

それから15年程経ち、自分がオーボエという楽器を持って訪れたオーケストラに、その「えびす様」が音楽監督として待ち受けていようとは、私にとっては大いなる奇遇でした。オケの練習中、事あるごとに岩城さんは「舞台の上では見た目も大事なからだから」と、奏者の姿勢（指先を含む）や顔つきにも言及し、音楽と視覚的要素の大切さを指摘する場面がしばしば見受けられました。やおら本番では、私が小さい時にテレビで見ていた岩城さんが、そっくりそのまま目の前で再現される姿に結構興奮を覚えたことも事実です。

彼の棒で特徴的なのは指揮棒を握る右手でテンポを作りながら、もう一方の左手で表情を示す仕草をすることです。これがまた具体的で国際規格の標識の如くとても判りやすいのです。たとえば握り拳を内側にたぐり寄せながら少し震わす仕草なら「ここはエスプレッシーボに弾いて!」、空を見上げるように顔を上げて大きく柔らかく手を握るなら「ここは憧れの気持ちと共に雄大に!」など、表情の指示が

どんどん伝わってきます。厳しい場面では顔が仁王様のようになることも。そしてこれらは指揮者から奏者への合図にとどまらず、会場のお客さんやテレビを見ている何万という人達にもはっきり伝わるメッセージなのです。「音楽とは聴かせるだけではなく見せるものなのだ」という彼の哲学を強く感じます。

岩城さんの棒で私が個人的にすごくなすかされたのが、数年前にアンコールで演奏したチャイコフスキーの「花のワルツ」です。特に小細工をするわけでもなく淡々と前に進む音楽なのですが、このほか説得力があり上質な威厳のある「花のワルツ」でした。それ以前もそれ以降も何度となくこの曲を演奏していますが、あの時の感動を凌ぐ場面にはまだ遭遇していません。ただ、私が想像するに、あの「花のワルツ」の演奏で、岩城さんは自分の音楽を「見せること」について特に意識はしていなかったのではないかと思います。まして演奏しているオケの中にこんなにも感動を覚える者がいたとは、ご本人は知るよしもないでしょう。

岩城さんの魔力に魅せられたたくさんの方々と共に、私もここに大いなる指揮者の冥福を祈ります。

高井明（オーボエ）

— 思い出のショット —



1971(昭和46)年 創立10周年で尾高さんと対談



1976(昭和51)年 当時愛用のパイプ



1980(昭和55)年 道庁赤レンガ前のグリーンコンサートで

編集後記

岩城さんのご逝去、皆さんが心から悼んでおられるものと思います。岩城さんのご著書を何冊か読ませて頂きましたが、あたたかいお人柄と謙虚さ、ユーモア精神にあふれるものばかりでした。一足先に逝かれた岩城さんの無二の親

友、山本直純さんと今頃「なあ、オメエ」「なんだよナオズミ」などという会話を交わされているのではないかと、ついつい想像してしまいました。「いつまでもお二人仲良く」とご冥福をお祈りさせていただきます。(佐藤良次)